

(4)太平洋戦争の捉え方

太平洋戦争の捉え方は、国際関係と、そのなかにおける日本の位置に対する認識によって異なるものとなる。戦後に丸山と親交を結ぶことになる中国文学者の竹内好は、米英の帝国主義とその圧迫に苦しむアジア諸民族との対立という枠組みで国際関係を捉え、日本が東アジアを解放する戦いとして太平洋戦争を位置づけた



(画像：竹内好と丸山眞男〈丸山彰氏提供〉)。

丸山の父・幹治はハルノートを見て、「これじゃ、戦争せざるをえないな」と言った。ここに丸山は、権益争いの果てに日本にとって譲れない一線に到達したと考える「普通のアリズム」を見出している。

これに対して南原繁は、ファシズム対反ファシズムという枠組みで事態を捉え、反ファシズムの側に価値を置く判断をした(前節参照)。これは、半年前の独ソ戦開始時に明確化したと丸山が考えていた、自由主義対国際ファシズムという図式に沿ったものであった。

晩年の丸山は、太平洋戦争はアメリカ、イギリス、オランダに対しては侵略戦争ではなかったと主張する言説に対して、以下のような考えを語っている。

ABCD 包囲陣に対する日本のディフェンスの戦争だったというのがよくあるでしょ。

それはあるところで議論を打ち切ってしまった。なぜ ABCD 包囲網ができたか、とい

うことを問わないわけ、それは。満州事変以後の日本の行動と関係するんですね。だから〔中国〕大陸〔の問題〕と切り離せない。（『戦争とオペラをめぐる断想』1994年〈『丸山眞男話文集』第3巻〉）

真珠湾攻撃にはじまる太平洋戦争は中国問題と切り離せない関係にあり、中国での日本の行動がアメリカなどの行動を惹起した点を無視できない。アメリカなどに対しても防衛戦争ではなく「アグレッシブ・ウォア」であったというのが、丸山の考える真珠湾攻撃であり、太平洋戦争だった。

だがそれは、真珠湾攻撃が報復のためにあらゆる攻撃が許容される「だまし討ち」であったことを意味しない。丸山は、アメリカの政治哲学者マイケル・ウォルツァーが1977年の著書 *Just and Unjust War* で行った議論を引き合いに、真珠湾攻撃と原爆投下を等価と考えるアメリカ人の考え方に疑問を呈している。

原爆を落とす以外に日本を降伏させる手段はなかったのか、軍事手段でいいんですよ、それ〔証明〕を全然していない。報復のためには一切が許されるという論理を許すとすれば別だが、そんなことはキリスト教の論理から言ってもあり得ない。（同前）